

北星学園大学文学部北星論集第60巻第1号（通巻第76号）（2022年9月）・抜刷

**【創 作】**

## お仕事小説

増 田 辰 良

創作

## お仕事小説

増田辰良

## 目次

- はじめに  
 1. 偉い人にはならない  
 2. 家蜘蛛  
 3. お見合い  
 おわりに

## はじめに

現在、心象(思い)や表象を言語化する方法論について、「猛」勉強中です。具体的には、異なる文体や言葉からなる文章表現技法について、実践中です。

文体や言葉は人文科学(文学)のみが関心を寄せる文章表現技法ではありません。例えば、数学、生命科学やアストロバイオロジーという理工系科学のみならず、社会科学系の法社会現象、経済理論を平易に紹介・説明するために、アニメ、絵本、寓話、小説、戯曲、落語・漫才などの文体や言葉がさかんに多用される時代となっています。

これは大学という狭い空間で生まれた専門知を世間知へと広める努力をすることが求められているからです。そのためには、たった一つの領域だけを対象とする専門家では不十分で、「千問家」(これは落語

家の故桂米朝の言葉です)になるよう切磋琢磨しなければなりません。

千問家になる、その努力を<sup>みの</sup>実らせるには住み慣れた心地<sup>こころ</sup>良い部屋を飛び出して、自分独自の文体や言葉を、心象や表象を言語化することに興味・関心があり、その能力を有している他領域の多くの研究者・専門家たちに曝し、積極的に批評を受けなければなりません。不可能の反対は挑戦です”。

三本の拙稿は仕事、組織や家族と個人との関係性をモチーフとした作品たちです。

## 1. 偉い人にはならない

幸せな職業選びとは。筆者はフィクションを通して答える。自分の人生観に合う職業に就くことであると。ただし、この人生観を変えることなく貫くには誘惑が多すぎる。身の周りがある〇〇欲、△△欲、……、に無頓着でいられるだろうか。

キーワード：関係性、職業選び、経済的成功、蜘蛛、偶然の一致。

大学教員としての退職日が近くなった。三十四年間、学生たちに向き合ってきた。教えるよりも、教えられることが多かった。この間、

学生たちの気質も時代とともに変わってきた。ある年度のゼミナール生たちは、ずい分と「金」への執着心が強かった。それはバブル経済が弾けた時代に育った子たちであった。きつとテレビ、新聞のみならず家庭内で金にまつわる話題をたくさん見聞したためであろう、と私は勝手な想像をしていた。そんな学生たちは就職については極めて保守的であり、決まって公務員になることを望んだ。その一方で、より高給を得られる職業にも強く憧れていた。生きることの質を収入のみで測っている印象を受けた。でも、肝心のリスクを取ることに腰が引ける学生たちでもあった。そんな彼ら彼女らに、私は自分の人生観をしっかりと育てよう諭してきた。この創作文はその時代の、ある学生との会話をフィクション化したものです。

— ある男子学生が研究室へ来た。

学生 先生、こんにちは。今、お時間をいただいてもよろしいでしょうか。

教授 やあ、君かあ、久しぶりだね。いいよ。どうぞ入ってください。

その椅子に座りなさい。

学生 はい。ありがとうございます。

教授 どうしたの？ 顔色が悪いね。

学生 はい。勉強疲れというか、進路に迷っているというか。このところ、気分がすっきりしません。そこで、先生と話がしてみたくなったのですよ。すみません。

教授 そうかい、そうかい。それは嬉しいなあ。君は三年生だよ。

(11)

あと半年もすれば就職活動だな。時間の過ぎるのは早いね。もう四年生になるんだなあ。

学生 はい。

教授 勉強かあ、ほんと疲れるよな。少し、しゃべってリフレッシュするかあ。じゃあ、改まって聞くけど、君は、なぜ大学へ進学してきたんだい？

学生 進学、ですか？

教授 なぜ、こんなことを訊くかと言うと、希望すれば誰でも大学へ入学できる時代になって、目的意識のないまま進学してくる学生たちが増えてきたからねえ。

学生 はい。僕は公務員になりたいという目的があって入学しましたが……でも、みんなそうだと思いますが、大学へ進学してきたのは他人よりも優れた能力を身につけて、給料の高い職に就くためでしょ。偉い人になるためです。

教授 そっかあ。偉い人かあ。まるで小学生のような答えだな。でもそんな気持ちで、大学で勉強しているのかい？ そうじゃないと思うぞ。あはっはっはっ。

学生 でも、学歴差が経済格差に反映してるって、さかんに言われているじゃないですか。

教授 うーん。そういう面もあるにはあるが……、お前の勝手な持論だと言われるかもしれないけど、勉強しているのは人生を楽しむ豊かに過ごすためにするものだと思うよ。

学生 教養が身に付くことでですか？

教授 それもそうだけど。たとえば、中国語でコミュニケーションができれば、中国人と友人になれるし、互いに文化や慣習の違いを理解できて楽しいだろ。そうすれば、お互いに大きな争いも

しなくなるし、みんなの心が豊かになるじゃないか。言葉が堪能になって、世界中の人たちと個人的に付き合えるようになれば、世界の平和にもつながるだろう。だから、日本語以外の外国語を勉強しているのさ。金儲けに結びつけちゃうと、勉強すること自体が楽しくなくなるよ。

学生 はい。それで、先生。公務員の採用試験を受けるのを止めようかと思うのですが。

教授 唐突にどうしたの？ それが進路の迷いなのかな？ でも、どうして？ 君は入学してから、一貫して受験勉強をしてきたのだから？ 今、十一月だよ。試験は来年の四月の中旬から始まるのだから？ もう、ギブアップしたのかい？

学生 いえ、そういうわけじゃないのですが。図書館にこもって、毎日、勉強をしていますが、虚しさを感じるのですよ。

教授 あはっはっはっ。笑っちゃいかんが、そうだろうな。過去問を解いて、決まった答えが出せるよう訓練しているだけだから。でも、どんな受験勉強も、そんなもんだろ。何年か前のゼミ生で、三年間試験の対策をしてあげただけで、受験する前の年の十二月に受けないって、言ってきた学生がいたよ。失敗することが怖かったみたいだ。

学生 失敗……民間だと、欲張らなければ、どこから内定をもらえそうですが、公務員は筆記試験にパスしても、さらに面接試験がありますから。失敗は怖いですよ。

教授 怖いかあ。そのゼミ生は学科でも成績がつねに一、二番だったので、鍛えればまだまだ伸びそうだったから、公務員受験予備校にも通わせただけだね。本人もやる気満々で受験すればどこかの役所に入れるくらい学力を身に付けさせただけで、いざ受

験する段階になって民間企業へ鞍替えをしたんだ。さすがに私も腹が立って、叱ったよ。

「なぜ、受けないんだ。土壇場になってリスクを取れないのなら公務員になりたいなんて安っぽい宣言をするな！ この三年間、何のために勉強をしてきたんだ。公務員になるという目的を実現するためだろ！」

私も受かるよう精一杯サポートしてあげたから、愛情の裏返しというか、期待が大きかった分だけ、落胆が怒りになったんだ。今では、反省してるけどね。

学生 でも、その学生の気持ち、よく分かりますよ。ほんと、専門科目の問題を解いていると虚しくて……。一次試験さえ受かるかあ、どうかも分からないし。

教授 受験勉強ばかりしているから疲れてくるんだ。たまには小説でも読んでごらん。生きる知恵を見つかることもできるから。田丸雅智のショートショートなんかは気晴らしになるぞ。私が最近読んだものだよ。あはっはっはっ。

学生 問題集とか参考書ばかり読んでますけど。

教授 そうだろ。それ以外であればどんな本でもいいから真剣に読み込む訓練をするといけどね。迷いの答えを探すのじゃなくて、自分の頭で考えて、答えを創り上げる力を養うことができると思うよ。本当は、この時期には卒業論文を書く準備をしたり、リポートを書くといいんだけどねえ。君たちの年頃は体力もあって、長い時間机にむかえるし、頭も柔軟だから、思うほうの想像力と創るほうの創造力が一番充実しているときなんだ。だから、潜在能力が一気に開花する年頃なんだけどなあ。毎日、マニュアル本を読んで、決まった答えを出す訓練をしているだ

けだから、そりゃあ、虚しいし、つまらないわなあ。

学生 そうなんですよね。大学受験の延長みたいで……。先生、大学教授って年収が一〇〇〇万円を超えてますよね。

教授 んんっ？ 何だ、藪から棒に。それは所属する大学の財政力によるよ。みんなが高級取りじゃない。事実、私はそんなに稼いでないよ。教え子のOBやOGのほうがもっと稼いでいる。給料の話をするとなげなくなるよ。

学生 大学の教員にも興味がわいてきまして……。民間であれば大手の不動産業ですけど……。公務員と比べて……。

教授 比べるって、年収かい？

学生 はい。民間は景気にも依存しますが、退職金まで含めた生涯所得でみると、国家公務員が一番高いですよ。

教授 そんなことに興味があるのかあ？ 進路の迷いって、金のことかあ？ ……じゃあ、これまでどおり、公務員を目指せばいいじゃないか。そこで偉い人になれば、さらに高給がもらえるのだから？

学生 そうなんですけども……。大学院への進学はどうですかね。大学の教員は安定しているし、時間の余裕もあつて、年収も高いようですし。

教授 そんなことはない。そりゃあ、幻想だ。入学定員を充たせない大学の教員は給料をカットされているよ。それに、時間だって余裕、ないよ。講義の準備をして、キャンパスライフがうまくいってない学生を指導し、毎回会議にも出席して、所属している学会や地域にかかわる雑用もこなし、それに本来の目的である自分の仕事をしなきゃならないからね。論文を書くことだよ。そんなに忙しいのですか。

教授 忙しいよ。それに、どだい進学しても、すぐには職に就けないよ。いいかい、大学院へ進学すれば最低五年間は奨学金以外の収入はない、と思わないと。それが最短だから。私なんか、三十一歳でようやくこの職に就けたのだから。今は少子化で、

どこの大学も経営のことを考えると簡単にパーマネントの教員を雇えなくなっているよ。任期付きの採用を増やしているから。大学院を修了して二十年以上定(研究)職に就けず、非常勤講師で食いつないでいる研究者たちがわんさかいる時代だよ。君は、そんなリスクを取れるかい？

学生 嫌です。

教授 そりゃあ、だめだわ。リスクを取れないと何も前進しないぞ。

私がこの世界に入ったきっかけは第一次オイルショックを体験したからだよ。大学入学時だった当時、狂乱物価でインフレの根源を解明し、それへの対策を立案することが社会問題となっていたんだ。ハイパーインフレの根源が大企業の価格づけにあるということ、私は価格の設定要因と決定要因に興味があつて、大学院で解明してみたかったんだ。将来、大学の教員になれば、年収がどうのこうのとは考えなかったよ。ただ目の前にある経済問題を自分でも解明してみたい、っていう強い気持ちだけで進学したけど。色んな選択肢があるように思えるから不安になるし、迷うのは当然だろうね。でも、迷えるって幸せなことじゃないか。

学生 そうなんですしうけど……。入試に必要な専門科目の問題も解くことができますが。

教授 そりゃあ、公務員受験の勉強をしていけば、自ずと解けるだろうね。でも、研究っていうのは、そういうものじゃないぞ。い

いかい、研究っていうのは、答えの決まっている問題を解くのがなくて、新しい解き方、もつと言えば、社会の役に立つ新しい知識を創ることであって、それには時間がかかるんだ。例えば、車に乗れば五分で着く場所へ、あえて徒歩で九十分かけて周りの景色を観察しながら行くようなものだよ。目的地よりも途中の景色の中に色々教えられることがあるんだ。それに一つの研究テーマで楽しいと思える瞬間はたったの二回しかない。

学生

へーっ。

教授

まず論文のアイデアが浮かんだとき、次に完成した論文がレフエリー付の雑誌に受理されたときだよ。この二つの時間の間でとてつもなくしんどい時間に耐えなければならぬ。むしろ、その時間を楽しめるくらいでないよ。苦多くして、楽少なだよ。苦しいのは嫌です。

教授

そうだろうね。これは重要なアドバイスだけど、君にとつて楽

な道と苦しい道があれば、あえて苦しいほうを選んでごらん。きつと、得るものは多いから。人間は苦しんでいるときが一番

成長しているときなんだ。民間への就職活動、公務員受験と進学、いずれが苦しいかな？ これもリスクの取り方の問題だな。あはっはっはっ。

学生

リスクですかあ？

教授

そう。でも、もつと大切なことは何か。社会や経済問題を解明して世の中に貢献したいという強い気持ちだよ。今、そんな問題意識をもっているかい？ 多くの先生たちは年収が高いからという動機でこの職に就いているわけじゃない、と思うよ。みんな研究を通じて世のため人のために貢献したいんじゃないか

な。金は二の次、三の次だよ……。いや、待てよ。それでもないかあ？

学生

でも、生きていくうえで金は必要ですよ。

教授

当たり前だ。金がないと選択肢が狭くなることもあるから。君だって、ご両親が授業料を払えるくらいのお金を持っているから、こうして大学へ通えるわけだよ。

学生

はい。両親には感謝しています。

教授

でも、人が仕事を選ぶって、金が基準なのか？ そうじゃない

学生

じゃあ、なんですか？ 食っていくために稼ぐのでしょ。

教授

いいや。よくワークライフバランスなんて言うけども、私は生き方だと思ふよ。自分の生き方と一致する仕事に就ける人が幸せなんだろうけど。ようするに、大学を卒業した後、どういう人生を歩んでいくのか、この際、真剣に考えてごらん。私は君の生き方を変えるつもりはないから。自分で悩んで答えを出さ

学生

……。

教授

人生には順番はないから。いつ死ぬか分からない。死ぬときに後悔しないよう、やりたいことを責任をもってやり通し、生きるのがいいんじゃないかな。金のことばかりを考えると、生き苦しくなるばかりだぞ、きつと。私も今年で六十七歳になるけど、自分の計画通りに実現する人生など皆無だったと思ふよ。人は予期せぬ出来事にうまく対処し、ときには闊い乗り越えながら置かれた環境を変え、自らも変わるきっかけにしているよに感じるよ。振り返ってみると、どんな経験も無駄にはなっておらず、真っ直ぐな一本道を歩んできたと思えるけどね。こ

う言うよ、カッコイイかあ。あはっはっはっ。  
我が道を行くですね。

教授

行けるようリスクを取ったのだよ。その結果さ。威張るようだけれどね、私が若い頃の自分を偉いと思えるのは、自分に拵おきてをつくったことだな。それは進むか留まるか、と迷ったときには必ず進むほうを選んだことなんだ。つねにポジティブに動くことを自分に課し、たとえ嫌でも進むほうに自分を向けていったことだよ。「不可能の反対は挑戦です」。進まないで後悔するよりも、進んで失敗したほうがいい。失敗は貴重な経験として残るから。次のステップに必要なことさ。もつと言えば、人生は、若い君にとっては足し算で、私のように歳を取った爺さんには引き算なんだ。もう、後がない。でも人間、いつかは死ぬ。だから若くても、人生の終わりを想定し、そこから逆算して考えてみることも大切だよ。たとえ答えが出ないとしても、死を考へることは、今を生きる感覚を高めることにもなるからね。こんな話をすると、超カッコイイか。あはっはっはっ。

教授

死ぬことですか？ 想像できませんね。

できんだらうね。私も君の歳には六十七歳になる自分を想像できなかったよ……。うーん。金といえば、世の中には年収

二〇〇万円よりも一〇〇万円を選ぶ人もいるからね。

学生

そんな人がいるのですか？

教授

いるよ。世の中には色んな人がいるから。金持ちだとか、幸せな人を羨むのは、その人の背後にある部分を知らないからだ。みんな悩んで努力しているんだ。例えば、大きな病院に勤務している医者であれば、高給を得られる。しかし、つねに組織内の軋轢あつらひに悩まされる。そんな悩みを抱え込むくらいなら、

高給を捨てて医者になりたいと思ったときの原点に立ち戻り、途上国へ行って医療を受けられない貧しい人たちのために、自分の知恵や技術で助けてあげようという人もいるんだよ。それも自腹だよ。ほんと頭が下がるよ。それに、こんな人もいるぞ。誰が聞いても羨むような商社や広告、マスコミに就職しても自分の生き方にそぐわないことを悟って、辞めて農業を始める人もいる。伝統的な時計職人になったOBもいた。中退してタクシートの運転ちゃんになったOB、スナックに就職したOGもいた。どんな仕事もみんな世の中の役に立つ立派な仕事だよ。

「籠かごに乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋わらじを作る人」って言うだろ。一〇〇人いれば一〇〇人の生き方があっていいんだよ。ようするに生きている自分は何でもって世の中に貢献できるのかを最初に考えるべきだらうね。公務員になりたいのなら、なぜなりたいたのか。なって、どんな仕事で市民に貢献したいのか。これってえ、面接で質問されそうなことだろ。まっ、いろんな本を読んだり、いろんな人と話をして自分という人間の本性を見究めることだな。これもカッコイイかあ。あはっはっはっ。

学生

自分の信念のために、進んで高い機会費用を取る人もいるということですね。

教授

そうだよ。公務員になりたい人だって、なかには受験浪人している人もいるくらいだからさ。人生、どう生きるかだよ。他人がいくら稼ごうが、そんなこと、どうでもいいじゃないか。自分はどうしたいんだよ。

学生

ちゃんと考えたことないです。

教授

そうだらうなあ。大きな苦勞もせずに生きてきただらうから。ときどき思うけど、今の若い人は自分の人生を他人に考えさせ

るよなあ。これって、余りにも自分の人生に対して無責任なんじゃないか。自分の人生なんだから自分で考えて行動すればいいじゃないか。君が選んだ仕事の中で最大限、努力していればそのレベルにおいて周りは応援してくれるだろうし、サポートもしてくれるよ。♪そうさあ、一〇〇%、勇氣、もう頑張るしかないさ♪。これって何かの歌の文句だったな。あはっはっはっはっ。「忍たま乱太郎」のテーマソングですよ。……先生は、ほんと優しいですよね。

学生 「忍たま乱太郎」のテーマソングですよ。……先生は、ほんと優しいですよね。

教授 ええっ? どうして? 嫌味や皮肉ばかり聞かされて、学生たちは嫌だろ。

学生 いいえ、慰めてくれたり、親切にしてくれるよりも、険しい未来へ押し出すようアドバイスや言葉をかけてくれるからですよ。本当は険しい方向へ進みたいのだけど、リスクのことを思うと、不安で怖くて進めないので。

教授 そんなに持ち上げてくれなくてもいいよ。あはっはっはっはっ。でも、よく分かっているじゃないか。悩みとか不安というものは、もっと先へという気持ちがあれば湧いてこないもので、ポジティブに考えるべきだよ。人生にはここで動かないと終わり、という覚悟を決めなければならぬと、一度や二度は必ずあるから。英語で言えば、「It's now or never!」(今、でしょ!)だね。

学生 そういう進むべき方向をアドバイスしてくれる大人がいないのですよ。

教授 そっかあ、そっかあ。君の周りには私のような小言幸兵衛こごとうべいさんがいないのだな? 「親の小言と冷酒は後から効いてくる」って言うけどなあ。あはっはっはっはっ。でも、金かあ。そうだよ

なあ。気になるよなあ。金の話しをすれば、私も就職したての頃を思い出すよ。もうその方の顔も名前も忘れたけど、同僚のある老教授から言われた一言を……。

学生 何で、言われたのですか?

教授 「論文を書いても偉い人にはなれない」

失礼な言い方かもしれないけど、その老教授は若造の私にとつて一目置かなければならないほどの研究業績がある方ではなかった。しかし、この一言は私の研究者としての姿勢と縁の切れないものとなったよ。それほど私は純粹だったということだ。あはっはっはっはっ。

学生 「偉い人」って、有名人になれないってことですか?

教授 いいや。「偉い人」とは、単純に学内でお金を稼げる人ってことだよ。

学生 どういうことでしょうか。

教授 それは論文を書くよりも学内行政に精通する人物になれば、役職にも就けて、お手当が入手できるってことだね。

学生 お手当ですか?

教授 そう。この点、私も△△長を複数年やらせていたでいて、ずいぶん、金銭的には助かったよ。当時、二人の子供たちが大学生になったばかりで、月給の半分が仕送りで消えてしまっていたのでね。あゝあ、このことか、って理解できたけど。それ以降、お手当をもらったことがないなあ。まっ、学生さんを相手に、こんな小言やグチを言っているようじゃあ、偉い人にはなれんわな。あはっはっはっはっ。

学生 どうすれば偉い人になれるのですか?

教授 う〜ん。選挙で選ばれることよりも、……そうだなあ、自分よ

りも、もっと偉い人から指名されることが多い。だから、おとなしくて従順な人が有利かな……。こんなこともあったなあ。若い頃に、ある会議で反対意見を出そうとしたら、事前に偉い人から脅されたよ。出せば、学内における君の立場に悪影響を与えかねない、とね。でも、私は出したよ。結局、選挙では私の意見が支持されたけどね。

学生 悪影響ですか？

教授 そう。重要なポストには就かせないってことだよ。

学生 それじゃあ、イジメじゃないですか。

教授 イジメどころじゃなくて、今ならパワハラだよ。

学生 大学の教授でもパワハラをしたり、受けるんですか？

教授 あるんだな、これが。権力を握っている者は平気でそうしたことを言うことがある。私は偉い人になってこんな職業に就いたわけじゃないから、自分の信念を貫いただけのことだよ。

組織のことになると、人は豹変するからなり。はっはっはっ。先生。教授って論文を書くことが仕事じゃないのですか。さっきの先生の話だと勉強が大好きでなければ務まらない仕事ですよ。

教授 オブ・コース！ そうだよ。でも、自分が年を取って、論文のアイデアも浮かばなくなり、また気力も薄れてくると、老教授の言った言葉の意味が理解できたよ。昇格前のみ論文を書いて早めに教授になつてしまえば、後はもう上がるところがないので、行政に精力を使うのか、それとも研究者になりたかった若い頃の気持ちを持ち続けて、論文を書き続けるのか。あの一言は金と学問を天秤に掛けているようで、とても嫌な気分になつたけどね。

学生 お手当てって、そんなに高額なのですか？

教授 それもその組織によるよ。フリンジ・ベネフィットだから。

学生 そうですかあ。……そんな姿勢の先生方もいるってことですね。で、先生はどっちですか。

教授 君には、どう見えるかな？ あはっはっはっ。

学生 もちろん後者ですよ？

教授 イーエス！ ありがと。私なんかは、出来が悪かったので、

恩師から「大学では行政も大切だけれども、まずは専門家に認められて、先行研究となる論文を書きなさい。それが教育に反映され、さらに世のためになればベストだよ」と諭されてきたから、老教授のさっきの一言は就職をして日の浅かった私には理解できなかったよ。ほんと。

学生 じゃあ、あれですか。学者になつても儲かる保証はないってことですかね。

教授 やっぱり、金に目が向くかあ。あはっはっはっ。そうでもないよ。収入と論文数とが比例の関係にある教員もいるよ。有名になつてテキストを書けば儲かるよ。でも、一般的には反比例の関係にあるな。おもしろいもので、論文数の少ない人が偉い人を選ばれる傾向があるよ。教員が書いた論文や本はグループ・スカラーや大学のHPに公開されているから興味があれば調べてごらん。すぐに分かるよ。あはっはっはっ。

学生 なぜ、反比例の関係なのですか？

教授 それは論文を書いている人は雑事に疎くなるので、稼ぐ機会を失うのさ。書かない人は時間に余裕があるので、雑事に敏感になつて、その処理能力を磨き、情報収集に長けてくるんだな。他人に認められる論文を書くことは、それほど時間と労力を使

うということだ。これは周りを見ていて実感するよ。でも、さつきもアドバイスしたけど、こんな偉い人になれる職も極めて狭き門になっているんだ。あえて、このリスクを取れるかい？

学生  
いいえ。取りたくないです。公務員が無難ですかね。でも、しっかり選択しないと……えらい損をしそうですね。

教授  
損かあ。「金は天下の回り物」とは言うけれど、自分に回ってくるよう他人とは違った努力をしている輩もいるみたいだぞ(笑)。この業界にはね。それが本望(ほんもう)かどうかは知らん。結局、人生観の違いだろなあ？

学生が帰ると、私は陽光が差し込んでくる南窓にゆっくりと近づき、見下ろした。華やかに着飾った女子学生たちが身体を大きく揺らせ周りに憚(はばか)ることなく、大きく口を開けて、談笑しながらこちらへ歩いてきていた。私は、ぼんやりと眺めながら、自分の学生時代を目蓋に浮かべていた。

わずかな仕送りで食っていたよな。その仕送りにも親爺やお袋が流してくれたであろう汗を感じ、申し訳なく思った。教えられるだけでなく、ちゃんと自分で勉強しよう。自分で自分の人生を変えよう、頑張ろう、と自分に鞭を打った。節約すべきベストスリーは家賃、服、食事であった。三畳一間の貸間は光熱水道費込みで六〇〇〇円。外用ジーパン一本、部屋着用ジャージ一本、できる限りの自炊。わずかな選択肢のなかで生活していた。これからの人生を、どう生きるか、なんて斜に構えて、仲間たちとよく議論をした。

偉い人にはなれなかったけれど、他の研究者たちが先行研究として取り上げてくれる仕事を十数本残すことができた。しよせん学者の貢献なんて、こんなちっぽけなものかもしれない。でも、研究者になる

ことを目指した若い頃、恩師に諭されたことを一つでも多く実現できたことに誇りを思う。金では買えない宝物だから。

(了)

付記。本稿の内容は、フィクションであり筆者が所属する組織とは一切、関係ありません。

「賢い(頭がいい)」からといって、社会の役に立つ論文が書けるわけじゃない。じゃあ、バカでいいののか、と言えば、バカではない。やはり、賢いことに越したことはない。ここで言うバカとは文字どおりのバカじゃない。常人が気づかない事象に執着し、「バカなことを考えているなあ」と他人から嘲笑されようが気にかけず、それをトコトン突き詰める性格のことである。一言で言えば、常人もうらやむ「鈍感さ」を持つ人間のことである。この「賢さと鈍感さ」とが合わさって、賞賛され役に立つ仕事ができる。

小説家の仕事とは、常人が見過(みすご)しがちな心象や表象を言語化することであるが、その小説を書くアイディアを得るにもこの「賢さと鈍感さ」は必須である。少し範囲を広げて言えば、いかなる創作活動であれ創作者はある種の変態性を身に付けていなければならぬ、と思う。これに対する無理解や嘲笑に耐えられるにはやはり「賢さと鈍感さ」が必須である。無理解や嘲笑に耐えられるには楽しい、おもしろいということを見つけて周りから何と言われようが、それを育てることである。

## 参考文献。

寺田寅彦(二〇二二)「科学者とあたま」中央公論新社編「教科書名短篇科学随筆集」中公文庫、十一〜十八頁所収。

## 2. 家蜘蛛

眼が覚めて顔を窓へ向けると、彼女が四角いテーブルで文庫本を手にコーヒーを飲んでるのが目に入った

「あゝあ、よく寝た。昨夜は三連戦だったから。ふっふっふっ。今、何時かな？」

「もう、九時二十分よ」

「あゝあ、そう。ここに来ると戦闘後はいつも爆睡できるよ。さて、起きるか」

「夕方までに帰らなきゃいけないのでしょ。出張は今日までよね」

「うん。大丈夫だ。夕飯時までに着いてればいいから。楽勝だ」

「コーヒー、あるけど飲む？ よければクッキーも」

「ただこうかな」

彼は洗顔と着替えをして、テーブルの椅子に座った。マグカップのコーヒーを一口飲んで、いつもよりきつい苦味を和らげようとクッキーをバリバリと齧った。

「小説？ どんなストーリーなの？」

彼は訊いた。

彼女は眼を文庫本から離さずに、そのストーリーを教えた。それを聞きながら彼はギクリとした。その表情を窺うかのように彼女が顔を上げたとき、束ねたカーテンに一匹の蜘蛛を見つけた。

彼女は平然と、

「ああ、あんな所に蜘蛛がいる」とつぶやいた。

「どこに？ どこ？」

(10)

「カーテンに。ほら、動いてるでしょ。降りてきてる」

「小さいな。よし、俺が退治してやるう」

彼は顔を突き出し、目を凝らして見つけ、腰を上げた。

「だめよ。朝の蜘蛛は仇に似ても殺すな、って言うじゃない。朝、蜘蛛を見ると金運が上がるとも言うわ。それに一寸の虫にも五分の魂って言うでしょ」

「そっ、そうかあ。でも、気色悪くないのか？」

彼は彼女の心を探ってみた。

「うん、平気よ。芥川の『蜘蛛の糸』じゃないけど、どこかで救ってくれるかもよ」

彼女は微かに笑みを浮かべた。

「じゃあ、ティッシュに包んでトイレへ流しちゃお。その小説のように」

「だめよ。退治しないで、家の外へ逃がしてあげて。お願いだから」

彼女はすぐに強い口調で指示した。

「分かったよ」

彼は蜘蛛をティッシュに包みテーブルの上に置いた。そしてティッシュの端に灰皿を乗せた。

それからタバコを一本、吸い終ると、

「じゃあ、今日は帰るわ。ちょっと会社へ顔を出さなきゃならないので」

と言って、丸めたティッシュを握り部屋を出て、電柱の真下にあるゴミ収集箱の中へ投げ入れた。

彼は引かれたカーテンから室内の灯りが薄っすらと漏れる時刻に帰宅した。夕食後、彼は斜め前に座っている女房に顔を向けてお茶を飲んでた。出張から帰宅した夜は後ろめたさからか、いつもより長く

女房としゃべる時間をとるようにしていた。今夜も出張中に読み終えたと言う文庫本の内容を意気込んで話し始めた。

「小池真理子の超短篇に『百足』<sup>むかで</sup>っていう作品があつて、これは浮気をしているダンナが自宅で百足を退治するときに、ドジを踏む話が描かれている。

「百足だ！ 百々子、その蠅叩きを取って」

と、とつさに浮気相手の名前を叫んでしまふんだな。もう最悪よお。

奥さんは博美<sup>ひろみ</sup>っていう名前なんだけど、この後の奥さんの表情と奥さんが問いかける間合いというか、空気の流れが実にうまく表現されているんだ。

ティッシュに包んだ百足をトイレに流して、ほっとして戻つて来たダンナは、「博美が能面のような顔をしているのに気づく」<sup>くんだ</sup>。ダンナがはっとした瞬間に、「百々子、つて誰？」と訊かれた。しまつたと後悔する間も弁解する間もなく、目の前の「妻は椅子から立ち上がった。その立ち姿は、一本の冷たい釘のように見えた」<sup>つてね</sup>。この最後の文章は小説の結末を読み手に想像させるための間合いになっている、と思うんだよなあ。うまい描き方だろ。

俺なら、「ダンナはぞつとした。冷たい手でふいに背筋を撫でられでもしたかのように、肌が粟立つのをはつきりと感じた」<sup>とか</sup>「妻はわめきもしなかつたが、ただじゃすまない様子がはつきりと分かつた」<sup>とか</sup>、どつちかのみを描くけど。でも能面の顔や釘のような姿は瞬間だけど、この空気は、ダンナの頭には永遠にインプットされちゃうよな。まさに、「デフォルトだ」

それまで黙って聞いていた女房は怖い目をして言った。

「何よ。表現も間合いもへつたくれもないわ。私ならすました顔なん

かしてないで、一本の釘なんてよりも、ストレートに、今にも脳天に五寸釘を打ち込んできそうな形相をしていたつて描くわ」

「それじゃあ、表現があまりにも露骨すぎて、読み手に読み込ませる、考え込ませる、想像させる間合いがとれないんじゃないか。空気の流れも大切なんだぞ」

彼は一応、空虚な反論を試してみた。

「でも、それくらい腹立たしいことじゃないの？ 浮気つて。絶対、許せない。そんな男」

そう言う女房の声は普段よりも力強く気持ちがかもつていた。

「そっかあ。お前はスーパーストリートだな。で、この夫婦はこの後、どうなると思う。想像してごらん。小説を読む楽しさは、この想像にある」

そのときだった。彼の背後にある壁紙の中頃を小指の爪ほどもある蜘蛛がゆつたりと降りてきていた。

それを見つけた女房は慌てふためいて、

「後ろに蜘蛛！ 蜘蛛！ 壁に蜘蛛！ 何とかしてよ！ 気色悪い！ 叩き潰してトイレへ流して！ 早く！」

と叫んだ。

振り向いて、蜘蛛を確認した夫は、ティッシュを手にして立ち上がり、「朝の蜘蛛は仇に似ても殺すな、つて言うじゃないか」

と、ティッシュに包んでベランダへ投げ捨てようと窓のロックに手をかけた。

「それじゃあ、また入ってくるじゃないのよ！ 今は夜よ。何を寝ぼけているの！ バッカじゃないの。夜の蜘蛛は親に似ても殺せ、とも言うわ。叩き潰してトイレへ流してつてば！ 蜘蛛とか百足つて大嫌い！ もう早くして！ 気色悪い！」

という怒号のような声が彼の背中を叩いた。

(了)

参考文献。

小池真理子「百足」北村薫・宮部みゆき編『読まずにいられぬ名短篇』ちくま文庫、二九一〜二九四頁所収。

3. お見合い

「よお、益男ますお！ お前、明日、見合いをするんだってえ？」

同僚はヘラヘラと笑いながら好奇心をかけてきた。

「ああ、現場総監督の紹介でえ、断りきれなくてさあ」

益男は仕方ない、というふうに答えた。

「どういう女性なの？」

「それがさあ、監督がよく行く店の看板娘だそうで、何度も話をして気心は知れているそうなんだ」

益男は正直に話した。

「そうかあ。監督のご推薦じゃあ、断られないわな。いよいよ独身生活も終わりかな？」

微笑を浮かべたままの同僚のその声は意味ありげだった。

「決めたわけじゃない。まだ顔も見えないし」

これは益男の本心だった。

「どうだ。独身最後の夜になるかもしれないし、今日は金曜日だし、いつもの店で楽しまないか？」

同僚は花金はなごんの夜の遊びを誘ってきた。

「おいおい、見合いの前日だけ、そりゃあ、ないだろ」

(一一)

益男は一応、とりつくろった。

「でも、結婚することになれば、当分、いや一生通えなくなるかもしれないぜ。それに奥さんにスペシャルテクニクをお願いすることもできないかもしれない。あはあはあはあ」

同僚は歯茎を出して笑った。

益男は一瞬、その光景が頭に浮かんだ。

「うくん。それもそうだな。通いなれた場所だしな。最後ということ、行くとするか」

益男は頬を弛め、あっさりを受け入れた。

「そうと決まれば、次の土台に早いとこコンクリートを流し込んでしまおう。使わない道具と資材は倉庫へ運んでくれ」

同僚は急かせるよう弾んだ声で指示を出した。

終業時刻を少し過ぎてから益男と同僚は通いなれた歓楽街へと急行し、幾つかの店を物色してから、いつもとは違う店へ入った。二人はお気に入りの女性おんなのこをご指名し、ウキウキした気分それぞれの個室へと消えた。益男は独身最後の夜になるかもしれない、と夢想し時間を延長し、思う存分、楽しんでやろうと意気込んでいた。

数回の戦闘が終止符を打った後、余韻を楽しむように寝物語が始まる。この種の店へ通う男たちにありがちなことであるが、益男も女性に訊かれるままに自分の趣味、学歴、職業、年収などを話していた。もちろん、事実を話すほど間抜けではない。

「お仕事のことを、お訊きしてもよろしいかしら」

「ああ、いいとも。私は祖父の時代から続く資産家の家に生まれ、一流の国立大学を卒業し、一部上場会社に就職し、二六歳で課長をしている。こう見えても毎日、ストレスとの闘いでね、金曜日にはこうし

た場所で思いっきり息抜きをしたいのさ。上役や部下のいないところ  
でね」

「立派な会社の課長さん？　じゃあ、チップもはずんでいただけるの  
かしら？　ふっふっふっ」

いかにも好色そうな含み笑いであった。

「もちろんさ。今夜が最後。もう君には逢えないかもしれないね」  
「そんなことおっしゃらないで、また来てご指名してください。他の  
女性たちも待ってますよ。ふっふっふっ」

「そもいかなんだよ。三〇代で、自分の会社を興す夢があり、そ  
のために婚期を延ばして、自己資金を貯えているさいちゅうでね。結  
構、初期投資が必要だからね」

「そうですか。大変ですね。課長さんならデスクワークをしてらっし  
やるんですよ。ずいぶんと、日焼けしてますね」

「ああ、日焼けね、いつも訊かれるよ。顔や首、腕だけが真っ黒だろ。  
これは学生時代にテニスの選手として活躍した名残だよ」

もちろん、この業界にはこれを信じるような初心な女性もない。  
通ってくる男はどの男もみんな寝物語として似たようなホラを吹くこ  
とを承知している。それでも男というものは過剰に女性の気を引き、  
サービスの質を上げてもらう魂胆からウソ八百を並べ立てるのである。

翌日の正午前、益男は約束したホテルのロビーで現場総監督と待ち  
合わせた。監督の顔は黒墨を塗ったように黒光りし、皺の弛んだ首と  
白い歯とのコントラストがまるで日本人離れたようだった。太陽の  
恵みをすべて吸い込んだ年季の入った顔と言えようか。

益男は監督に誘導されるまま、最上階のレストランへとエレベータ  
を昇った。エレベータ内では、口元と目元を弛めっぱなしの監督は「清

楚で上品な娘さんだから粗相のないよう、しつかりやれよ」と益男の  
肩をパッシパッシと叩いた。

レストランに入ると、監督は「あの女性だ」と窓際のテーブルに座  
る和服の女性を指差し益男の背中を押した。女性はしきりにスマホを  
操作していた。うつむいているためその表情を窺い知ることはできな  
いが、日本髪と和服のよく似合う小柄な女性だった。それはまさに益  
男好みの女性でありグーンと期待度の針は大きく揺れた。ドッキンド  
ツキンと高鳴る心臓の鼓動を抑えつつ、ゆっくりとテーブルへと近づ  
いた。

けれども、これ以降のことはどうしても書くことができない。どう  
か想像していただきたい。その席にいたのが誰であろう昨夜の女性だ  
ったのだ。それが分かるやとすぐに益男の脳裏には女性の艶かしい肢体、  
獣のような奇声、恍惚感に充ち足りた表情、女性と交わしたおしゃべ  
りの数々が浮かんだ。その光景を振り払うように首をササッと左右に  
動かした益男は顔と背中の中の毛穴という毛穴から脂汗が噴き出てきた。  
が次の瞬間にはぞっとするばかりか、底なしのクレバスへ突き落とさ  
れそうな寒気を感じた。

スマホの操作を終えると、女性は近づいてくる益男のほうへ眼を上  
げた。はじめ女性は、益男だとは気がつかぬらしかったが、やがて両  
の瞳は見ひらかれ、開いたままの上下の唇の間からは白い歯をのぞか  
せ、手はわなわなと震えはじめた。そしておもむろに立ち上がると、  
どんよりした眼で益男をじっと見つめた。どういふわけか益男も突っ  
立ったまま両手をテーブルの端に乗せ、相手を見つめた。

「こちらが私の会社で働いている近藤益男さんだよ」  
満面の笑みを浮かべて監督が口火を切った。

女性は静かに腰をおろして、テーブルを凝視したままコップの水を小刻みに飲んだ。その額には冷や汗らしきものが浮かんでいた。

それまで凍りついていた益男は、監督に促され、席につき「ああ、どうも……」と首を下げたが、突然、耳たぶのあたりからびっくりするほど熱くなり、その熱は顔じゅうに広がっていった。(こいつはとんでもないことになるぞ!) この後に起こるであろう修羅場を想像した。

(了)

付記。この作品は生きる世界が狭ければ、実際にありうる三人(益男、女性、監督)の関係性を描いたものです。「結び」の描き方からすると、シヨートシュートやコントになりそうな作品でもあります。

## おわりに

伊坂幸太郎は自身が編んだアンソロジー(『小説の惑星 ノーザンブルーベリー篇』ちくま文庫、二〇二一年)の作品解説において、次のことを書いています。

作家は常に「もっといい言葉(表現)がないかな」と考えて文章を作っている。よく使われる表現はなるべく避けたいが、かといって難しいあるいは奇をてらうような言葉だけは避けたい。違和感と新鮮さがちょうどいいバランスで味わえるような読者が思わず、にやりとしたり、はっとするような言葉を選んで(二七〇頁)。内容についても真面目な人から、「ふざけすぎだ!」と怒られてしまいそうな妄

(一四)

想を、ただの悪ふざけで終わらせることなく、生真面目に小説の形にしてしまう、できてしまう力こそが小説家の才能のように思う(二七六頁)。また、描かれているものが何であるか読み取れないものの、その作品と向き合っていると、こちらの想像力や記憶、内なる何かが刺激され、感動を覚えるような内容であってもよい。

三本の拙稿は、こんなことを心に留めて、創作してみました。心象、表象と、モチーフである関係性はうまく表現できているだろうか。ぜひ、批評をいただきたい。

